

## 心なおしによる平和

—現代日本の新宗教の平和主義—

島 蘭 進  
(日本・東京大學校)

---

---

《요 약》

---

---

일본의 종교계는 2001년에 일어난 미국에서의 동시다발적 테러사건 이후, 적극적으로 평화를 위한 활동에 뛰어 들었다. 가령 뉴욕에 본부를 두고 있는 세계종교자 평화회의(WCRP)는 일본 종교교단들이 상당히 깊숙이 관여하고 있는 세계적 규모의 종교협력단체로서, 미국에 의한 보복공격의 억제를 꾸준히 그리고 강력하게 호소해 왔다. 1970년에 설립된 이 세계종교자 평화회의의 설립자 가운데 한 사람이자, 30여년에 걸쳐 지도적인 역할을 수행해 온 인물로서 입정교성회(立正佼成會)의 개조인 니와노 닛쿄(庭野日敬)를 들 수 있다. 니와노는 1930년에 범화경에 의한 선조 공양의 가르침을 깨달은 후, 불교의 핵심이 이타행 실천에 있다고 가르치면서 열심히 포교활동을 계속해 왔다. 1950년대 이후에는 종교협력과 사회참여에 적극적으로 전념했으며, 그 결과 입정교성회의 종교활동 전체 속에 평화운동이 큰 부분을 차지하게 되었다. 니와노는 불교의 가르침이야말로 평화를 실현하기 위한 핵심적인 사상을 담고 있다고 설한다. 즉 자연과 타자 사이에 조화로운 관계가 유지되도록 평화의 마음을 실현해야 한다는 가르침이 그것이다. 특히 분노와 질투와 공격적인 마음을 가지지 말며, 자비의 마음으로 타자를 대면하는 것이 중요하다는 것이다. 그는 이것이 우주 본래의 실재와 합치함으로써 가능하다고 주장한다. 이처럼 모든 것이 일치할 수 있다고 굳게 믿는 니와노는 종교협력이 평화실현에 있어 중요한 방법이라고 간주한다.

그런데 니와노가 ‘평화주의국가 일본’이라는 이념에 많은 부분을 의거하고 있기는 하지만, 이런 이념이 과거의 전쟁에 대한 일본의 충분한 반성에 입각한 것인지는 의문의 여지가 있다. 나아가 그는 상이한 종교간의 일치 가능성에 대해 다소 낙관적이며, 또한 불교와 동양사상이 평화를 지향한다는 이해에 대한 비판적인 성찰이 미약하다는 한계를 안고 있다. 그럼에도 불구하고 일본의 민속적 종교토양에서 생겨난 종교적 평화주의의 이상 및 실천으로서, 니와노 닛쿄와 입정교성회에 대해서는 충분히 검토해 볼 만한 가치가 있다고 여겨진다.

---

---

## I. 九. 一一以後の日本の宗教協力組織の行動

二〇〇一年九月一日のアメリカ同時多発テロの後、日本の宗教組織はテロと戦争の抑止を目指し積極的な行動をとってきている。そのことをよく示すのは、宗教協力組織の発言と行動だろう。神道、仏教、キリスト教、新宗教の五つの連合組織（神社本廳、全日本仏教會、教派神道連合會、日本キリスト教連合會、新日本宗教団体連合會）がさらに連合して構成されている日本宗教連盟では、一〇月一六日に理事長である白柳誠一樞機卿と他の五名の理事全員の名前で、「戦闘によらない解決を求める聲明」を發表した。この時期の日本では一〇月七日に始まるアメリカのアフガニスタンへの武力介入を支持するかどうかで世論が二分していた。最大の讀者をもつ讀賣新聞は、アメリカ支持の立場から一〇月六日の第一面のトップ記事で「對テロ 果斷な行動を」という新聞社としての緊急提言を掲げていた。日本宗教連盟は日本のもっとも包括的な宗教協力組織であり、この組織がこの時期にかくも迅速に平和を願う姿勢を示したことは大いに注目される事柄だった。

それに先立ち、早くも九月一八日、世界宗教者平和會議日本委員會は白柳誠一理事長と杉谷義純事務總長の名前で、「米國同時多発テロに對する聲明文」を出している。この聲明はテロに對する強い憤りと犠牲者への哀悼の思いを述べ、罪のないイスラム教徒に不当な危害が及ぶことへの憂慮を表明した後で、次のように述べている。

ブッシュ米國大統領は、テロ事件を新しい戦争と定義し、それこそ國運を賭けてその解決をはかろうとし、多くの國々の指導者もそれを支持しています。私たち宗教者は、テロ行爲を憎み、二度と起こしてはならないと思考するについて人後に落ちません。犯人は嚴正なる法の裁きを受けるべきであります。しかし、過剰な解決策が新たな問題を惹起したり、善良な市民を巻き込むことがないように切に要望いたします。

すでにアメリカではタリバーンへの迅速な報復攻撃を行おうとする世論が優位を占めていたが、この聲明はそれに對する懸念を表明している。そして、これに續く最後の一節は、この聲明が宗教者としての立場からのものであることを明白に示す内容となっている。

最後に、今回の事件は人間が起した事件であり、決して他人事ではなく自分の問題として一人ひとりが眞摯に受けとめていただきたいと思います。そして、まだ家族の安否すら確認出来ない多くの人々にお見舞い申し上げ、重ねて犠牲者のご冥福を祈るものであります。

世界宗教者平和會議はアメリカ、日本、インドなどの宗教者がよびかけて一九

七〇年に第一回の會議を京都で開き、會議の成功を踏まえて、常設機關の設置が決議されたものである。以後、四、五年ごとにルーベン、プリンストン、ナイロビ、メルボルン、ローマとリバ・デ・ガルタと世界各地で會議を開いており、一九九九年にはヨルダンのアブドラ國王がホストとなり、アンマンで開かれている。ニューヨークに國際委員會を置き、二〇〇〇年現在で、世界三五カ國に國內委員會が設置されている。アンマンでの第七回會議（W C R O VII）には、世界七〇カ國から一、二〇〇名が参加した。

世界宗教者平和會議は二〇〇一年一〇月二三、二四日の兩日、ニューヨークでシンポジウムを開き、執行委員會名で「テロリズムを排し、正義に基づく平和を構築するために、宗教者からの緊急提言」と題された聲明文を公表した。この聲明はテロを厳しく非難するとともに、宗教間の融和と對話を促し、貧困と暴力と不正に目を向けるよう説き、具体的な方策として國連の特別總會を開會し、國際法に基づき、テロリズムに對抗するための包括的な國際條約を締結するよう求めている。シンポジウムのパネルディスカッションで、日本委員會の事務總長であり、天台宗の僧侶である杉谷義純は「未來を築く」と題し、テロの再發を防ぐには、（１）貧困と抑壓の追放、（２）公平な社會、（３）固有の文化伝統の尊重、の三つの方策を實現することが重要であると論じた。とくに貧困が大きな問題であることを強調して、杉谷は次のように論じている。

確かにグローバリゼーションの荒波は瞬く間に世界をおおい、特に經濟的側面  
で多くの恩恵をもたらしたものの、一方では大きな歪みを生み、國家、地域間に  
甚だしい格差が生じました。又科學技術万能主義は、あちこちで伝統文化の破壊  
をもたらしました。このような近代文明の負の遺産は、かつての歴史上の負の遺  
産の發生が、戦争や違法行為の結果生じたのと異なり、合法的な政治や經濟活動  
の結果生じたことに注目しなければなりません。すなわち、ますます富める國と  
貧しさが少しも改善しない國の出現は、合法的な結果であったとしても、それは  
人類全体の福祉の観点から見れば決して好ましいものでないことを宗教者は聲を  
大にして叫ばなければなりません。何故ならば大きな格差は貧しい人々の絶望を  
生み、それがやがて怨みへと轉ずるのにそう時間がかからないからです。

W C R P の姉妹組織である A C R P , アジア宗教者平和會議は一九七六年にシンガポールで最初の會議を開き、翌年から継続的な組織となったものであるが、二〇〇二年六月、第六回目の會議をインドネシアのジョグジャカルタで開いた。その第一研究部會は「軍縮と安全保障」をテーマとしたものであるが、議長の杉谷義純は討議の結果のまとめを次のように始めている。

私たち宗教者は、いかなるテロをも容認することが出来ないことを再認識する。テロリストを自由の戦死と呼んで容認したり、テロに對する國家の報復行動もテロ行為に他ならないので、これを正当化してはならない。すなわち、無辜の

市民を死に至らしめる行爲は絶対に認めることは出来ない。しかしながら、私たちは中東における未来ある若者が自爆テロに走らざるを得ない現実に対し、単にテロを批難するだけではなく、宗教者として深い洞察力をもってテロの背景にも注意を注がなければならない。

これに續いて、このまとめは南北の格差がますます広がる現実に注意を促し、人間が絶望に追いやられる状況があるとし、先進國の責任を厳しく問うている。

人間をこのような状況に追いやる行爲は、テロ同様に厳しく批難されるべきである。すなわち、人權の抑壓、不平等は必ずしも専制國家ばかりが行っているのではなく、民主主義國家といわれる先進大國の行爲が結果的に多くの差別を生んでいること、その國の政府はもちろん、その宗教者及び市民に対し、自分たちの國が誤りを犯していることを知らせなければならない。

WCRPとACRPは國際的な組織であるが、その結成の過程から今日に至るまで、日本の宗教者、宗教教団、宗教協力組織はたいへん大きな役割を果たしてきた。冒頭に紹介した日本宗教連盟は、WCRPの最初の會議である京都會議の開催の母体となった宗教協力組織である。以上に紹介してきたいくつかの聲明やまとめは、いずれもWCRPやその周辺の日本の宗教協力活動が、この三〇年余りの間に培ってきた思想と行動にながしかを負っている。WCRP日本委員會を中心として活動しているこのネットワークの思想と行動は、現代日本の宗教者の平和運動を理解する上で、きわめて大きな意義をもっているといえる。

以下では、このWCRPをめぐる平和運動の歴史のあらましを振り返りながら、その日本におけるもっとも力強いリーダーとよべる庭野日敬の平和思想と行動について述べていく。庭野は立正佼成會という独自の在家仏教教団、あるいは新宗教を創設し、死後の今も多くの人々の敬意を集めている宗教者であるが、その平和思想は廣く今日の日本の新宗教の、また日本仏教の平和思想の特徴をよく示していると思われるからである。

## II. 日本のWCRP運動の歴史と庭野日敬の役割

WCRPの創設に盡力した人々の一人であり、初代の事務總長を務めたホーマー・A・ジャック (Homer A. Jack、ユニテリアン) は、この運動が多くの人々の協力によって成り立ったものであるとしながら、あえて創設者の名前を挙げるとすれば、アメリカのデイナ・M・グリーリー (Dana McLean Greeley、ユニテリアン) とモーリス・アイゼンドラース (Maurice Eisendrath、ユダヤ教改革派)、インドのR・R・ディワカー (R.R. Dewakwer、ヒンドゥー教) とアン

ジェロ・フェルナンデス (Angelo Fernandes、カトリック)、日本の庭野日敬 (仏教、立正佼成會)、三宅歳雄 (神道、金光教)、西ドイツのマリア・A・リューカー (Maria A. Lüker、カトリック) の七人だと述べている (Jack, 1993)。

アメリカでは一九六〇年代の初めからグリーンリーらによる超宗派・超宗教の平和運動の模索が進んでおり、国際的な協力にも積極的だった。日本では一九五〇年代から宗教協力による平和運動がさまざまな形で進められ、海外の宗教者との交流も試みられていた。この二つの動きが合流し、一九六八年に京都で日米諸宗教平和會議が開催され、世界宗教者平和會議の開催を約束した (WCRP の歴史については、庭野、一九八七―八八、Jack, 1993、および、額賀、二〇〇〇、参照)。開催地の有力候補はインド、アメリカ、日本だったが、結局、京都に決定したのは日本の宗教協力が幅廣いものであり、多くの人々と組織がそれに關わり、財政的にもしっかりした基礎をもっていたことが大きな理由である。

第二次世界大戦後の日本の宗教界は、宗教協力と平和運動の双方にたいへん熱心に取り組んだ。これは一つには、被爆國としての自覺から核兵器の脅威に取り組む氣持が宗教界にたいへん強かったという理由がある。また、一九二〇年代から四五年にかけて多くの宗教集団が政府、軍部、警察から抑壓された経験をもっており、信教の自由を守るために団結しなければならないという考えが生じたという理由もある。さらに、外來のキリスト教の影響を強く受けるとともに、多くの新宗教が発展した日本では、早くから近代社會における宗教の多様性についての意識が廣まったということもある。多様な宗教の分裂を超えて、一致を目指さなければならないという考え方は一九二〇年代から一定の賛同を得るようになっていた (中央學術研究所、一九八九)。

このような背景の下で、平和運動に大きな力を發揮した宗教協力団体が二つある。一つは神道系、仏教系などさまざまな新宗教教団が加盟した新日本宗教団体連合會 (新宗連) であり、一九五一年に結成されている。立正佼成會、パーフェクト・リバティー (PL) 教団、妙智會教団、松緑神道大和山、解脱會など一九二〇年代以降に設立された教団が加盟しているが、その多くが後に WCRP の運動に積極的に關わるようになる。新宗連は結成の翌年の一九五二年に日本宗教連盟に加盟した。この日本宗教連盟が第二次世界大戦後の日本の宗教協力運動で大きな役割を果たした第二の団体である。日本宗教連盟は日本キリスト教連合會、教派神道連合會、全日本仏教會、神社本廳の四団体によって一九四六年に構成されていたが、新宗連の加盟によって五団体から構成されることになった。

これらの団体は國內で協力して平和運動や精神性を基盤にした社會改革に取り組むとともに、海外の宗教者、宗教団体との協力をも積極的に追求した。後者について述べると、一九五五年にはすでに東京で海外からの代表者四〇人を招いて宗教世界會議が開かれていたが、一九六三年には核兵器禁止宗教者平和使節団が

派遣され、ローマ教皇、ロシア正教大主教、カンタベリー大主教、國連のウ・タント事務総長と會見したり、ジュネーブでWCC（世界教會協議會）本部を訪問したりした。立正佼成會の庭野日敬はこうした宗教協力と宗教による平和運動のほとんどすべてに積極的に参加し、その独自の仏教理解に基づく社會倫理思想とともに、強力な組織力や財政力を背景に精力的な行動を行った。

庭野日敬（一九〇六一九九）は山深い新潟縣の農村に育ち、尋常小學校卒業の後、東京に出て商店で店員として勤めるうちに、子どもの病氣などがきっかけで信仰を深めるようになった（庭野と立正佼成會については、庭野、一九七六、同、一九八二、森岡、一九八九、参照）。何人かの民俗宗教的な宗教家の指導を受けた後に、法華經を奉じる在家仏教の新宗教教団、靈友會と出會い、やがて宗教活動に専念するようになる。ところが、法華經を尊びながらも、その學習を軽んじた靈友會の指導者に従うことができず、長沼妙佼とともに獨立して、一九三八年、立正佼成會を設立した。

一九二〇年代から六〇年代にかけての時期は、日本の新宗教が急速に發展し、神道や仏教の既成教団に對抗するだけの巨大な勢力を形づくるに至った時期である。新宗教は大きく、仏教系と習合神道系の二つの系統に分けることができるが、靈友會や立正佼成會は最大の新宗教団体である創価學會とともに仏教系の新宗教に屬するものである。そして仏教系の新宗教の多くは法華經を重んじ、一三世紀に活躍した日蓮が廣めた思想や信仰活動に大きな影響を受けている。既成仏教が寺院と僧侶を主体とし、葬祭儀禮と死後の救済に力点があるのに對し、これら仏教系の新宗教は在家信徒自身が日常生活の中で仏に近づくことを目指そうとする。家族や職業活動からなる日常生活がそのまま仏道修行の道であり、また、救済の實現の場であると信じる。俗人自身が日々の儀禮や信仰活動に積極的に取り組み、リーダーとなって熱心な布教を行うことが是とされており、自ら「在家仏教」の運動を推進するものと理解している（島蘭、一九九二）。

日常生活を導き、熱心な布教を促す仏教的な理念は菩薩行であり、これこそ法華經が強くその實踐を訴えるものである。菩薩は自己自身の悟りを求めるとともに、時にはそれ以上に他者の救済を追求する。このような理念に導かれ、法華經や日蓮の伝統を引く新宗教教団は、苦しんでいる人々、困窮している人々、悩んでいる人々に手を差し伸べ、ともに助け合って生きていく人生を理想とする。それは日々の暮らしの中での利他的な倫理性としても現れるし、熱心な布教活動として現れることもある。多くの教団では、さらにそこに國民の、また人類の社會生活全体への貢獻という目標が加わることになる。立正佼成會はこの三つの分野のすべてに熱心に取り組んでいる代表的な新宗教教団である（このような行動を促す庭野の仏教理解については、庭野、一九六一、が基本的な文獻である）。

庭野は立正佼成會の開祖として半世紀にもわたって教団を指導し、巨大な教団

へと発展させた。立正佼成會の會員は一九四五年には公称、一、二七七世帯であったが、一九五五年には三二〇、八四七世帯（約一〇四万一千人）に達し、一九八〇年には約五三〇万八千人へと増大していった（なお、これらの會員數はやや誇大に計算されている。このような教団規模の誇大な自己評価は日本の宗教団体に廣く見られる傾向である）。庭野はこの巨大な教団の指導者としてそれを統率し、會員を指導するとともに、積極的な對外活動を進めていく。宗教協力は新宗連の結成に貢献し、その後の新宗連で常にリーダーシップをとり續けていく。それにとどまらず、日宗連をはじめとするその他の宗教協力運動にも盡力を惜しまなかった。他方、WCRP以外にも平和運動への貢献を目指し、庭野平和財団を設け、庭野平和賞を授与したり、研究助成を行うなど、多彩な活動を行ってきた。さらに、會員が加わりながら地域の他の人々と協力して、地域社會の改善を目指す「明るい社會をつくる運動」をも推進してきた（キサラ、一九九二、同、一九九七）。

このように多面的な社會活動、政治活動を行うという点では、立正佼成會はそれより一回り大きい創価學會（一九八〇年には、公称會員、約一六〇〇万人）とよく似ているが、創価學會は他のあらゆる宗教を邪教として批判する排他性を特徴とするのに對して、他宗教も根本には同じ精神をもっていると考え、他宗教との融和の姿勢を重んじ、積極的に協力して人類社會の改善を目指そうとする点で對照的である。創価學會はWCRPの運動や他の宗教協力運動にまったく關与せずに、單獨で平和運動や社會活動を進めている。このように日本の宗教教団の中には、宗教協りに積極的な教団もあり、そうでない教団もあるわけだが、立正佼成會は積極的な教団の代表的なものである。WCRPの運動や他の宗教協力運動には、他にも多くの教団や個人が協力したが、立正佼成會と庭野日敬の盡力がなければ、それらはずっと小さなものになっていたことだろう。そこで以下では、庭野日敬の宗教協力や平和についての思想と、その背後にある彼の仏教理解についてやや詳しく見ていくことにしたい。

### Ⅲ. 庭野日敬の仏教理解と平和思想（1）

これから庭野の仏教理解と平和思想について検討するが、主な資料として一九七二年に刊行された著書、『平和への道』を選びたい。その理由は、①この書物は庭野の平和思想がもっとも包括的に述べられているものであること、②世界宗教者平和會議の發足の頃の考え方をうかがうことができること、③その後、今日に至るまで平和運動に關心をもつ立正佼成會の會員にとって、依據すべきもっとも重要な平和思想のテキストと見なされていることなどによる。

この書物の第一章は「平和とは何か」と題されている。庭野はその冒頭で、平和とは「人と人との間、人と自然の間に、和やかさと、順調さが保たれている状態」であるという。そして、それはまず心から広がっていくものだという。つまり一人一人の人間の心が平和になることが基本で、そこから世界の平和がもたらされるはずだ。その点をなおざりにして、世の中の仕組だけを変えてもほんとうに平和が成就することはない。では、「平和的な心」とは何か。仏教でいう「慈悲」、キリスト教でいう「愛」をもって人に對する心である。

　　廣やかな気持ちで他を包容し、他の過ちをトゲトゲしく咎め立てすることなく、争わず、苦しめず、怒らず、妬まず、つねに他とともに幸せを得たい、と望む心です。／といえ、何の奇もないことと感ぜられるかもしれませんが、その何の奇もない心を、われわれは、なかなか成就できません。なぜ成就できないか……その原因を追及してみますと、ギリギリ最後に突き当たるものは、人間の貪欲というものです。貪欲こそが元凶なのです。法華經の譬喩品第三に「諸苦の所因は貪欲これ本なり」と喝破してあるとおりなのです。（二二ページ）

　　貪欲は心の平安を失わせる。そしてそれは理性を失わせ、本能に身を任せることであり、文明以前の動物的な段階に陥ってしまうことである。

　　他の動物と同じように、ほんの目先のことまで慮ったりすることができません。そういう状態を、ほんとうの意味での「愚かさ」というのです。仏教でいう愚痴とは、このような愚かさを指すのです。（中略）

　　ですから、世の中を平和にするためには、まず、お互いの一人びとりが、ほんとうに知恵のある人間となって、右に挙げたようなさまざまな欲望を制御できるようにならなければなりません。欲望を制御するとか、貪欲を減するとかいうことは、言うべくしてなかなか行い難いことです。（二四―二五ページ）

　　そうした心の状態を実現するには宗教が必要だと庭野はいう。宗教は教えと行の両方を提示する。教えは經典に記されており、宇宙と人生の眞理を説く。それは「科學の究極や、哲學の神髓や、倫理の大道と一致するもの」（二七ページ）だが、心の底から深く納得させてくれるのは宗教の教えであるという。根本の眞理を示している經典として、庭野は法華經の前に置かれ、法華經とともに讀誦される無量義經の一節を引いて、現代語譯を付している。

　　「応当に一切諸法は自ら本・來・今、性相空寂にして無大・無小・無生・無滅・非住・非動・不進・不退、猶お虚空の如く二法あることなしと觀察すべし」

　　この世のあらゆるものごととの奥にあるものは、宇宙ができてから（本・來・今）ずっと変わることなく、一切が平等で、しかも大きな調和を保っている世界（性相空寂）であります。／われわれが肉眼で見る現象世界では、大きいとか小さいとか、生ずるとか滅するとか、止まっているとか動いているとか、進むとか



退くとか、さまざまな差別や変化があるように見えますが、しかし、その根本においては、ちょうど真空というものが、どこを取っても同じであるように（猶お虚空の如く）、ただ一つの眞理にもとづく、ただひとつの世界であること（二法あることなし）を見極めなければならないのです。（二七―二八ページ）

ここに述べてあるように仏教は根本の眞理として、「すべて存在するものは、その根源において平等である」ことと、「この宇宙の實相は大きな調和のすがたである」ことを説く。すべての目に見える現象の大本に、それらを生じさせる「宇宙の實相」がある。これが「空」とよばれるものだ。この實相世界の「大調和のすがた」を深く納得するとき、平和な心を求める気持ちが強い確信となる。また、このような眞理を凡人が心の底から納得するには、行が必要となる。たとえば、法座の説法に加わったり、経典などを讀誦して、「毎日くり返しくり返し心にしみこませる」のが有効なのだ。さらに眞理を説く人、生きた人格である信頼できる師について學ぶ必要がある。これらが科學や哲學や道德と宗教との大きな違いである。

このようにして、自らの心を変えてゆき（「心の改造」）、自分のまわりに平和が廣まっていくようにする。こうして家庭、社會、國家、世界へと平和が廣まっていくように、他者へと働きかけていく。これが菩薩行である。自らの悟りのために現實生活から離れてしまうのではなく、他者とともに汚辱に満ちた世界に生きながら、すべての人に内在している仏性を發見し、發掘し、その實相を見つめる。そのようにして自らも眞實に目ざめるとともに、他のすべての人も同じ境地に達するように手を差し伸べる。そのようにして、この世に理想世界を現出させるよう努める。これが庭野が信じる仏教徒の理想の人生である。

このような仏教徒の理想の生き方を示す印象的な物語や教説を、庭野はいくつか経典から選び出して紹介している。一つは法華經の提婆達多品第十二である。法華經のこの章は仏陀のいとこで子どもの頃はライバルであり、後に仏陀の弟子となったが、仏陀に反抗して脱退した提婆達多(Devadatta)について述べている。提婆達多は阿闍世(Ajataasatru)太子をそそのかせてその父、頻婆娑羅(Bimbisara)王を殺させ、さらには自ら仏陀を殺そうとした。結局、提婆は地獄に落ちるのだが、庭野はこれを、最後には非暴力の立場が勝利するということを教えるものだという。ところが法華經によると、その提婆達多と仏陀は、前の人生でも特別の間柄にあったという。前世の仏陀は國王の地位にあったが、その安樂な暮らしに満足できず、すべてを捨てて法華經を知っているという仙人の召使いになった。生活万般の世話をしたばかりでなく、地べたにうつぶせになって仙人の腰掛けになるということまでした。その仙人が提婆達多の前世の身だという。だから提婆への感謝の念を忘れないのだという。

この物語は自分に對して攻撃する他者を恨むことなく、恨みを捨てることに

よって恨みの連鎖がなくなるという思想と関わりがある。仏陀が生存中に説いた教えを比較的、正確に伝えている経典として尊ばれているという法句教(Dhammapada)には次のように説かれているという(一三二ページ)。

「わたしは罵られた。わたしは害された。わたしは敗れた。わたしは奪われた」という思いを懐く人には、恨みの静まることがない。

「わたしは罵られた。わたしは害された。わたしは敗れた。わたしは奪われた」という思いを懐かない人には、恨みが静まる。

およそ、この世においては、恨みは恨みによって静まることはない。恨みを捨ててこそ、恨みは静まる。これは普遍の眞理である。

この言葉を物語の形で語った「仏説長壽王経」というお経がある。そこではコーサラ國の慈悲深い長壽王ととなりのカーシャ國の王の物語が語られている。カーシャ國王は戦いを避けるため、コーサラ國を譲った長壽王を火あぶりの刑に處した。長壽王の子の長生王子はそれを恨み、狩に出て家來たちとはぐれたカーシャ國王を殺そうとするが、躊躇して殺せない。目が覺めたカーシャ國王に王子は、死に際に父がいった「恨みは恨みによって報いれば、また新しい恨みを生む。そしていつまでも消えることはない」という言葉が思い出されたため、殺せなかったのだと語る。それを聞いたカーシャ王は自らの非に氣づき、王子の前に手をつけて深く詫び、コーサラ國を王子に返し、以後、友好を保ち、コーサラ國は幸福を取り戻したという。

だが、これらの教えは眞理についても妥協するという事まで認めたものではない。仏陀は眞理のためには武器をもって身を守ることは認めている。ただ、「抵抗していいが、殺生はしてはならない」という範囲内のことだという。涅槃経(Mahaparinirvanasutra)の金剛身品第五では破戒の比丘におそわれようとした正しい比丘を武力で守った王がその戦いで落命したが浄土に生まれ変わったと語った仏陀の説法がある(一三七ページ)。

その説法に對して 葉(Kasyapa)が「比丘が刀杖を持った信者に守られて歩くのは破戒にならないのでしょうか」とお尋ねしたところ、「破戒にはなりません、また、在俗の人たちが正法を守るために刀杖を携えても、戒に背くものではありません。ただし、刀杖は携えても相手の命は取ってはなりません」とお答えになりました。

このような教えを体現した菩薩、すなわち修行僧のモデルを示しているのが、法華經常不輕菩薩品第二十である。この章で語られている常不輕(Sadaparibhuta)菩薩は、どこへ行っても人さえ見れば「わたしは、あなたを敬います。けっして輕んじたり、見下げたりしません。あなた方は、みんな菩薩の道を行じて、必ず仏になるかたであるからです」といい、兩手を合わせて礼拝する。拜まれた人の

中には腹を立てる人もあり、罵られることも少なくなかったが、けっして怒ることはなかった。この青年層は経典も読まず、説教もせず、ただひたすら人を拝み続けた。「常不輕菩薩」というのはこのように「仏性をもつが故に軽んじない」という姿勢を持ち続けた修行僧という意味のあだ名である。この物語を語った後で、仏陀は「この常不輕菩薩は、實は私の前世の身なのだ」と明かした。庭野はここに「對人的には柔軟、眞理を守ることにかけては頑強」という生き方が示されているという。これこそが、「眞の勇者であり、平和人間であり、しかも人生の達人である」といい、非暴力に徹する平和の使徒の生き方だという。

#### IV. 庭野日敬の仏教理解と平和思想（2）

このように平和はまず一人一人の心を変えることから始めなければならないとした上で、庭野はその精神を「形ある現実の世界」に具体化していかななくてはならないという。この節では、庭野が平和思想をどのように、平和のための具体的な方策につなげているかを見ていくことにしよう。

その具体的な目標の最大のものは「非武装」(non-armament)だという。「非暴力」の理想は「非武装」という形で現実かされなければならない。それは他者を信用できないために武装し、武装すると他者に不信の念を起こさせるからだ。この悪循環は個人同士で起こると同様に、國同士の間でも起こる。果てしない軍備擴張がその歸結だ。このような軍備擴張のために貧困や開發や環境の問題がなおざりにされている。しかもこのような強大な軍備の下で核兵器による大量殺戮に進みかねない。

それでは、戦争を回避するには、どうすればよいか、ということですが、先に述べた「武装している相手は心から信用できない」という原理にもとづいて、軍備を撤廢することです。武装をやめることです。これが、地球上から戦争をなくす最も直接的な、そして最大の道なのです。

實際に、一九五九年の國連總會に、全加盟國が「全面軍縮(disarmament)に關する八十二カ國決議」を提案し、全會一致で採擇されました。そのことは、通常兵器を含む各國の軍備を完全に撤廢するという大目標を、世界の國々がこぞって打ち立てたことを意味し、とにもかくにも、戦争回避の足掛かりができたわけです。(六〇ページ)

庭野の考えでは、この「完全軍縮」は世界連邦ができなければ實現しない。國連は國家間の紛争が戦争に發展しないための話し合いの場として設けられたが、大國が主權を主張して譲らなければ、どうすることもできない。したがって、眞に權威ある國家紛争解決の機關をもとうとすれば、どうしても國家の主權を超え

たものでなければならない。それが世界連邦の構想だ。だが、これは現状では實現が困難だ。だから日本でも平和憲法が「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」としているが、必要最小限の軍備として自衛隊の存在は容認できる。とはいえ、自衛隊の軍備増強には反対だという。

しかし、軍備の縮小、撤廃だけでは平和をもたらすことはできない。まず必要なのは、發展途上國の貧困をなくすための開發である。先進國は發展途上國に少しばかりの援助の手を差し伸べているようだが、大きな流れとしてはそれを見捨てようとしている。このため、貧富の差が極度に擴大している。

こうしたアンバランスは、開發途上國の敵意をそそり、その不満の爆發が紛争や戦争の原因となります。いや、たとえ紛争や戦争は起こらなくても、こういった飢餓・貧困の状態があるということ自体が、世界が平和でない、ということになるのです。

ですから、われわれは先進國の國民という立場からも、また宗教者という立場からも、こうした國々の開發ということに意を注ぎ、具体的に援助の手を差し伸べていかねばなりません。

また、すべての人が平等に生きる権利を持った存在であることを形の上で確認できるようにすること、すなわち人権の問題がある。

人権の侵害は、平和の問題と直接つながるものです。抑壓と差別に苦しんでいる人びとは、せめて人並みの生活をかちとるために、いや、それよりも耐えがたい侮蔑からのがれ、人間の誇りを回復するために、死を賭して立ち上がります。そして、多くの人の血が逃れ、命が奪われる結果となるのです。

ですから、世界に平和を實現するためには、人権の問題をおろそかにすることは許されません。とりわけ、われわれ宗教者が、この問題についてウヤムヤな態度をとるならば、宗教の眞實性は地に墜ちてしまうことでしょう。なぜならば、どの宗教においても「人間の平等」こそ、教義の根幹なすものであるからです。(九一—九二ページ)

とはいえ、宗教家には「人間の権利思想の行き過ぎにブレーキをかける」という大きな役割もある。他の人々のことを省みない権利の主張は平和を亂す。宗教は「多くの人びとの幸福のためには自らの権利を犠牲にすることも辞さないという精神を養う」ことができ、それによって平和に貢献する。このような権利の抑制と人権の確立とは對立するものではない。

開發、人権に加えて環境の問題がある。自然破壊の進行は主に先進國がその責めを負わなければならない。その遠因として西歐的な人間本位の世界觀がある。

「人間以外の」、あらゆる生物・無生物を、どんなに酷使し、どんなに殺生してもかまわない」という考え方だ。このような自然破壊をなくすために、宗教者は

精神的革命を進めなければならない。

仏教の『諸法無我』の眞理、すなわち「この世の万物万象は、ひとつとして獨立した存在（我）はない。すべて、ある原因（因）と條件（縁）が造り現わしているものであり、したがって、すべてが相依相關している存在である。これを人間に即していえば、人間は天地の万物によって生かされているのである」という思想を、世に徹底させることです。（一〇一ページ）

以上、非武装、開発、人権、環境という政治的、社会的な平和運動の主題についてあらまし述べてきた。これらは庭野が考える平和運動の、具体的な目標の主要なものである。それと並んで庭野は宗教による平和運動の方法論をもっており、それについても詳しく述べている。すなわち宗教協力である。

庭野が宗教協りに乗り出したのは、外部勢力から攻撃を受けたり、世間からの迫害や中傷を受けたことがきっかけになっており、一九五一年にさまざまな新宗教教団の連合体として新日本宗教団体連合会（新宗連）が結成された。そこからさらに宗教協力の輪が広がり、神道・伝統仏教・キリスト教の諸教団とも協力する氣運が生じてきた。核実験の派對運動や平和のための國際會議のために宗教間の協力が進むということもあった。一九六五年に第二バチカン公會議に招かれたことは、宗教協力への期待をさらに高めることになった。このように宗教協りと平和運動が並行して進んだわけだが、庭野にとっては宗教協力は社会的な立場の確立や平和運動のための手段として考えられたわけではなく、それ自体が一つの高い意義をもったものと考えられていた。

当初、庭野は「宗教統一」が可能だと考えていた。それはそもそもすべて正しい大宗教は一つのもを信仰の對象としていたと考えたからだ。「この大宇宙と、そこに存在するさまざまな物体や生命体の根源を探ってゆきますと、ただ一つのエネルギーに歸着します。そのエネルギーが、さまざまにはたらきだして万物・万象を造り現わしているのです。」（一九八ページ）その根本のエネルギーは宇宙の生命そのものであり、仏教ではそれを「空」とよび、キリスト教では「神」と呼んでいる。では、なぜ世界中にたくさんの違った宗教があるのかというと、昔は地球上の交通が不便で生活圏が狭かった故に、お互いに違うものを信じていると思いきがちだった。しかし、人間の集團の規模が次第に大きくなっていくと、そのような狭苦しい考え方は通用しなくなってくる。皆がともに一つの「宇宙の生命」を信じるということを納得できるようになるだろう。法華經は未來にそのような宗教統一が可能になることを預言している仏典として解釋することもできるのだ。

やがて、庭野は宗教統一を性急に唱えるのは得策ではないと悟るようになり宗教協力の推進を説くようになるが、それでも宗教協力を単に平和運動や社會活動の手段と考えているわけではない。宗教協力は形の上のみの協力を意味するので

はなく、心の底から理解し合い、手を握り合うことをいう。宗教協力そのものが平和を実現していく過程なのだ。そして、宗教は本来そのように深いレベルでの一致を実現できる可能性をもっているはずだ。

すべての大宗教は、その根底において、人類愛を説き、心の平和を説いています。そういった宗教の信仰者は、少なくとも信仰を持たない人よりは、はるかに強い平和への願望を持ち、すべての人間に対する愛情を持ち、しかも、その願望と愛情を行動に現わす術を知っています。ですから、信仰者こそは、人種の差を超え、國家の別を超えて、一つ心に結び合える可能性を、最も多くそなえている人間である——と、私は確信するものです。そう確信すればこそ、宗教協力を懸命の努力を拂っているのであり、宗教協力とは、そのような深い心の結びつけの上に、強い平和の砦を築くことにほかならないのです。（二〇四ページ）

## V. 現代日本宗教の平和思想の特徴

庭野日敬は平和運動に熱心に取り組む一つの団体の指導者に過ぎない。仏教の中だけに限定しても、熱心に平和運動に取り組む人々は他にも多数ある。しかし、立正佼成會は日本の宗教全体を見渡しても、もっとも行動的・精力的に宗教活動に取り組んでいる教団であり、日本仏教の平和主義勢力を代表する人物とあってよい。その平和思想には日本の宗教の、とりわけ日本の仏教や新宗教の平和思想の特徴がよく現れていると考えてもよいだろう。もっともここで検討してきた庭野の著作は、一九七二年に書かれたものであるから、状況認識は現在のそれと大きく異なるものであることを記憶にとどめておきたい。以下では、庭野に典型的に見られるような、現代日本宗教のある種の平和思想の特徴を、三点に整理して述べることにしよう。

### 1. 現世志向(this-worldly orientation)と社會参加(social engagement)

庭野はこの世で平和を実現することが、仏教の本來の目標の延長上にあるものととらえている。そのためにこそ熱心に現實社會の中で平和運動を行うのであり、その意味でたいへん現世志向的な、また社會参加的な仏教觀をもっている。

まず、現世志向的ということだが、家族や職場や地域社會のような日常生活の中で、他者との関係の中でこそ仏教の目指す理想は實現されると信じられている。良き聖なる力がこの世（現世）の中で働いており、それを生活の中で具現す

ることが信仰生活の目標である。死後の救いはあまり問題にされず、また現実社会から離れて、僧院や山林の中で個としての悟りを得ることは求められていない。こうした現世重視の世界観に対応して、究極的なリアリティである「空」は現世で働いている「宇宙の生命」とされ、現世で善を實現する力の源泉ととらえられている。人間同士の関係、人間と自然との関係も仏教の教えに従い、行を行うことで幸福で調和あるものへと変えていくことができると信じられている。

また、庭野の仏教観はたいへん行動的で社会参加的である。これは他者の救済のために努力することを促す菩薩行の理念に導かれている。だが、個人的に宗教活動の中で、あるいは日常生活の中で他者に働きかけていくのにとどまらず、政治的行動や他の社会集団との協力にも積極的に関わろうとする。軍縮・開発・人権・環境などの問題に進んで取り組もうとしていることに見られるように、さしあたり宗教と切り離して取り組まれるべき社会的な問題にも、宗教の立場から積極的に取り組むべきだと考えている。その場合、宗教の立場というのは個人が自らの心を変えること、そして慈悲や非暴力の精神に基づく調和ある関係をつくっていくところにあると見なされている。

このように現世志向的で社会参加的な仏教のあり方は、大乘仏教、とりわけ法華経に顕著に見られる菩薩行の精神にのっとったものと理解されている。だが、菩薩行の理念は個人個人の救済を目指した宗教活動に力点をおいて理解することもできるのだが、ここでは社会的な行動を重んじる方向で受けとめられている。そして、個人としての宗教的実践と世界平和のための社会参加的な実践が、なめらかにつながっていると理解されている。これは参加している平和運動が、確かに世界の政治社会に具体的に働きかけ、一定の効果を及ぼしていると感じられていることによって説得力を強めている。自分たちが孤立した集団に属するのではないと感じられるので、社会参加が意義ある宗教的行爲だと受けとめられうるのだ。これは一九世紀以来のナショナリズムと関連づけることによって理解できる面もある（島蘭、一九九二）。

一三世紀末、元の襲来に脅かされた日本で、日蓮は法華経の現世志向的で社会参加的な姿勢を國家の救済の思想と結びつけた。近代化に乗り出した一九世紀、二〇世紀の日本で、この日蓮仏教、すなわち國家救済の教えとしての法華仏教の思想は新たな輝きを帯びることとなった。一八九〇年代以降に顕著な影響力を及ぼした國柱會や、一九二〇年代後半以降に急速な發展を見せた靈友會の運動がその例である。近代になって日蓮系の仏教は著しい發展を見せたことで際だっているが、それは日蓮仏教がナショナリズムと親和性をもっていたことと関わりがある。立正佼成會はこのナショナリズムと結びついた現世志向的で社会参加的な仏教の系譜を引いている。しかし、一九四五年以降、庭野日敬はこの伝統を普遍主義的な方向へと向け直し、宗教協力と平和主義の理念を支えるものへと轉換させ

たのだった。

## 2. 宗教協力の経験、および平和主義國家日本という思想

庭野の宗教協力と平和運動は、戦後の日本の宗教教団が置かれた状況や、当時の日本社会で受け入れられていた価値観を大きく反映したものである。上に述べたように効果ある運動を組織しえたのも、一つには宗教協力の成功によるところが大きい。だが、庭野にとってそもそもこの宗教協力は効果ある行動を行うための手段の地位にとどまるものでなく、それ自身、高い宗教的価値をもつ実践と考えられていた。宗教協力と平和運動が支え合うことにより、社会参加が宗教的価値と社会的政治的実効性をともにもった行動となることができたのだ。

庭野ら戦後の宗教指導者が国際的な宗教協力を熱心に取り組むようになったのは、まず国内での宗教協力が盛んであったことによる。これは日本では少数の宗教教団が獨占的、寡占的なシェアをもっているのではなく、多様な宗教集団が併存する状況にあったことが影響している。一九世紀末から二〇世紀にかけて、世界的に多元的な宗教の併存が自覚され、相互協力の必要性の認識が深まる気運にあったが、日本では一九三〇年代以降、政府や軍部によって、また戦後はマスコミや他教団の攻撃によって、宗教集団が抑圧を受けたという経験もあって、宗教協力の必要性がひととき強く意識されることとなった。庭野日敬の場合は、戦後にマスコミや創価學會の攻撃を受けたという経験が宗教協力の推進に力を入れる大きな動機となった。

ところが、その宗教協力が急速に拡大してやがて世界的な舞台で高い成果を得ることができたわけだから、庭野がそれに高い価値を与えようとしたのは当然だった。この時期、宗教協力によってまことに多くの成果を得た宗教的リーダーとして、庭野は世界的にも目立つ存在となったのだった。庭野はこの宗教協力の成功の経験を平和主義と結びつけた。宗教協力が可能であるということが、平和の可能性を先取りして示しているものと考えた。実際には、当初は自己防衛としての宗教協力という側面が大きかったのだが、そこから国際的な行動の機会や平和主義的な含意を引き出し、積極的な意義を与えていった。世界的に宗教の多元性の認識が高まり、宗教的寛容の必要性が自覚される時代状況であったが、庭野はその潮流を的確にとらえ、平和主義と結びつけつつ、行動に移すのに成功した。

庭野が平和運動に熱心に取り組んだのは、また、第二次世界大戦後の日本の政治意識の全体的傾向をも反映している。すなわち、大戦で悲惨な敗北をしたという経験、とりわけ原爆被爆國となったという体験と、その後の平和憲法を掲げる國家への変革を通して、日本は世界に向けて平和を訴える新たな使命をもつ國に



なったという考えである。庭野はこの考えを受け入れ、現代の日本が平和主義の國だという前提に立ち、さらに日本にとってそのことが大いに幸いだったという。これも日本の経済的な成功が強く意識された一九七〇年代から八〇年代にかけて広く受け入れられた考えであるが、庭野も次第にその点を強調するようになる。すでにWCRPやその他の活動を通して、かなりの国際交流の経験を積んだ後の一九八四年に刊行された『平和への提唱』で、庭野は次のように述べている。

かつての日本は、世界の列強に伍していくために富國強兵の道を急ぎ、ほとんど資源を持たずにこの狭い國土に閉じこめられていたのでは、これだけの國民をかかえて生きていくことはできない、と考えていました。そして中國大陸やアジアの諸國への進出で活路を見いだそうとして、それが侵略戦争をひき起こす結果になってしまったのです。／しかし敗戦によって、日本は致命的な痛手を負ってしまいました。どうやって生きていったらいいのだろうかと途方にくれたその國が、戦前をはるかに越える繁榮を築くことができたのは、世界の各國が、平和憲法の精神を堅持しようとつとめている日本を信頼して惜しみなく資源を回してくれ、製品を買ってくれたからでした。そして、私たちが何よりも世界の人びとに知ってもらわなくてはならないと考えるのは、日本の今日の繁榮は、戦争を放棄したことで軍事費を使わずにすんでいることによってもたらされたものである、という事実なのです。(三五―三六ページ)

庭野はこうした日本の繁榮のすぐ近くで、韓国と北朝鮮が未だに統一國家を實現できずに軍備に力を入れざるをえない状況にあるという事情をまったく理解していないわけではない。また、WCRPがベトナム反戦運動の渦と関わり合いながら形成されたものであることは忘れようのない事実だから、沖縄を初めとする米軍基地が「平和主義國家日本」の支持の下で、朝鮮戦争以来、アジアの戦闘に用いられ続けてきたことを理解していないわけでもない。だが、庭野が平和主義の國としての日本の使命にふれるとき、これらの問題に触れることはあまり多くない。

### 3. 文明論的平和主義と仏教・東洋思想への樂觀主義

ロバート・キサラは現代日本の新宗教の平和主義を論じた『宗教的平和思想の研究』で、廣く日本の平和思想の特徴を論じ、江戸時代以来、文明が育成する個々人の道徳と関連させて平和をとらえ、平和思想が文化的民族的優越感と結びつく傾向があると論じている。道徳的な文明を体現する日本や東洋が、物質文明によって勢力を擴大する西洋文明に對して優位に立っており、だからこそとくに平和を目指し、世界を導く使命をもつとする考え方である。その背後には、中國文化の長い伝統である華夷思想を日本的に組み替えた独自の華夷思想の伝統があ

るという理解である。

キサラはこうした特徴をもつ平和思想を「文明論的な平和思想」と名づけ、多くの新宗教教団にこの特徴が見られると論じている。立正佼成會も例外ではないとして、キサラは庭野がアジア宗教者平和會議（A C R P）の開催の主旨を説明して、「究極のところ戦争と平和が人々の心の中から起こる以上、人間そのものを見つけ直さなければならないというアジア的な考え方」について述べているのを引いている。

庭野が仏教は元來、平和を求める宗教であるということを大いに強調していることは、第三節で見てきたとおりである。だが、その背後には、仏教を初めとする東洋（アジア）の思想や文明が、平和を求めるという点で西洋の思想や文明、少なくとも西洋の近代思想や近代文明に優っているという考え方が確かにある。

西洋の國々が近代社會をひらいてきた原動力は、科學の方法によっているといってもいいのではないかと私は考えます。科學の方法は、分類し、分析し、秩序づけることを特色としています。人間の生き方も当然その影響をうけます。近代社會では、個人の自由、権利、契約が重視されるようになりました。／それに對して東洋の精神は、大自然の道にのっとることを中心にすえ、伝統的な方法を重んじ、礼節、譲り合い、融和をより大切にしてきたといえましょう。／科學的方法の成果である西歐の近代化は、とりわけ技術や物の生産の面で飛躍的な進歩をもたらし、物質文明の面で人類に大きな貢獻をしました。しかしその一方で、一人の利益は他の人にとっての損失、一國の正義は他の國にとっての不正義という對立的な見方をも深めてしまったように思えます。いま西歐諸國が直面している危機、核軍備を背景にした米ソ對立を頂点とする世界の危機も、そこに根ざしているともいえるのではないのでしょうか。／それに對して東洋に伝統的な考え方は、自他を一つと見る見方です。東洋的思考法の淵源となっている思想、とくに仏教は、自他の區別をなくすことを目指す教えともいえます。けれども、それが自他未分化の混沌とした社會を濫存し、近代技術文明の恩恵からとり残される人びとを生んでしまった一面もありました。しかしその東洋の思想は、ゆきづまった現代の世界に新たな示唆を与えうるものを内に藏していると私は考えるのです。（『平和への私の提唱』二七—二八ページ）

このような東洋思想理解、仏教理解は庭野の現代史に對する評価にもよく現れている。W C R P が創始された一九七〇年頃の庭野は、戦後の賠償問題に關わって次のような仏教理解を示している。

一九五一年（昭和二十六年）サンフランシスコで開かれた對日平和會議の席上で、セイロン國の代表ジャワルデーナ氏は、この法句經の名句（第三節の引用文参照——島蘭注）を引いて、「セイロン國は日本に對して賠償を求める意思はない」という演説をされました。満場万雷のような拍手が、しばしば鳴りやまなかったといえます。／セイロンは仏教國です。國民の八〇パーセント近くが、熱

心な仏教徒です。しかし、一國の利害を背負って他の國々と折衝する外交ということになれば、個人と個人の付き合いのようには、いかないものです。威したり、騙したり、駆け引きをしたり、相手國の仲間をこっそり味方に引き入れたり、土壇場で味方を裏切ったり、まったくゴロツキ同然の淺ましきです。そういう外交の舞台の上に、仏陀の教えが一國の外交政策として堂々と述べられたことは、なんと感銘深い事實でありましょう。そして、他の國々の代表も感動の拍手をもって、それを賛えたという事實に、わたしは「人類には、まだ救われる道が一つ残っている」ということを、マザマザと感じ取らずにはいられないのです。（『平和への道』一三三—一三四ページ）

筆者はこのような例を引く際には、仏教が戦争に積極的に關与してきた例をどのように考えるのかも問い返した方がよいと感じる。事實、日本の歴史ある仏教教団はいずれも第二次世界大戦中に國家の戦争遂行政策に進んで協力し、戦闘を鼓舞するような説法を行うことが少なくなかった。いくつかの伝統仏教教団では戦争協力の歴史についての検討が進んでおり、過去の教団や宗教者の戦闘鼓舞的な行動や發言を厳しく批判し反省する試みもいくつかある。だが、一九三八年に發足し、戦時中には小さな団体にすぎなかった立正佼成會の場合、このような過去の戦争協力の歴史に踏み込む必然性がそれほど大きくなかった。敗戦までは小さな集団であり、戦後に大教団に發展したために、過去の戦争との關わりを問われることがあまりなかった。だからこそ東洋思想や仏教の平和思想としての価値を強く主張することができる立場にあったといえるかもしれない。

だが、それは東洋思想の歴史や日本仏教の歴史に即して、平和思想を述べるという努力を輕んずる傾向とつながったかもしれない。また、仏教や東洋思想が平和を思考するものだという点について、やや樂觀主義に過ぎる評価を招いているかもしれない。なお問い返されるべき点問題点は他にも見いだすことができるだろう。だが、庭野日敬やWCRPの平和運動が、現代の宗教的平和運動として目覺ましい成果をあげていることは疑いがないところである。筆者自身、こうした試みがさらに深化し、擴充していくことが、人類社會の平和に大いに貢獻するであろうことを確信している。

《參考文獻》

- 中央學術研究所編，《宗教間の協調と葛藤》，Conflict and Cooperation between Contemporary Religions 佼成出版社，一九八九年。
- ロバート・キサラ，《現代宗教と社會倫理》，青弓社，一九九二年。
- \_\_\_\_\_，《宗教的平和思想の研究：日本新宗教の教えと實踐》，春秋社，一九九七年。
- 森岡清美，《新宗教運動の展開過程：教団ライフサイクル論の視点から》，創文社，一九八九年。
- 額賀章友編，《WCRP 世界宗教者平和會議30年史》，財団法人世界宗教者平和委員會、二〇〇〇年。
- 庭野日敬，《法華經の新しい解釋》，佼成出版社，一九六一年。
- \_\_\_\_\_，《平和への道》，佼成出版社，一九七二年。
- \_\_\_\_\_，《庭野日敬自伝：道を求めて七十年》，佼成出版社，一九七六年。
- \_\_\_\_\_，《私の履歷書》，日本經濟新聞社，一九八二年。
- \_\_\_\_\_，《平和への私の提唱》，佼成出版社，一九八四年。
- \_\_\_\_\_，《WCRP の道・その一～その八 庭野日敬法話シリーズ 7～9、12～16》佼成出版社，一九八七—八八年。
- WCRP 創立十周年記念實行委員會編，《世界平和への祈りと實踐：世界宗教者平和會議（WCRP）十年の歩み》，世界宗教者平和會議日本委員會，一九八一年。
- 島蘭進，《現代救濟宗教論》，青弓社，一九九二年。
- Homer A. Jack, WCRP: A History of the World Conference on Religion and Peace, World Conference on Religion and Peace, 1993